

---

# ツルッぱげ！

豊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツルッぱげ！

### 【Zマーク】

Z9839C

### 【作者名】

豊

### 【あらすじ】

本作品は打ち切りになりました。諸事情が重なり。

## No.1 ハゲはいじ子息様？（前書き）

若干、木浚塚とキャラが被るのは、リア友だからなのでその辺は頬  
みます

## No.1 ハゲは「じ」子息様？

……朝、それは俺が最も嫌いとする時間。

俺の名前？

本多泰世ほんだだいしゃ

世って、や、と読めるのか？

話しあ戻して、

理由は大きく分けて2つある。

1つ目は眠い。

2つ目はだるい。

ただそれだけ。

なんて簡単な理由なんだろう、といつも思つ。

まあ、楽しみもある。

それは朝のバイキング。

食べ放題つていいねえ。

あ、別にホテル暮らしじゃねえぞ。

家が金持ちなだけだ。

簡潔に言つと、

先祖は本多つて言ひ、徳川家の重臣で、有名なところを言ひと本多忠勝かな。

まあそんな訳で、何代前かが事業を成功させて、今は年収30兆らしい。

俺には関係ねえけどな。

家を継ぐだけだしな。

まあ一つ言わせてもらひと、家継ぎたくないし。  
そんな俺なんだが、一応高校には通つている。

一番賢いらしいが、俺自身テスト受けて無いから分からん。

そろそろ、飯食いに行くかあ。

なつがーい廊下を歩いていき、着いた先には和服のメイドさんたち  
が、きれいに一列に正座で並び、俺の到着に合わせて、きれいな礼  
をしてくれた。

「おはようござります、ミシ子島様。」

「こつもい苦労さん。母さんとかにせりあわねるんでしょう？ 大変だね。」

文字数が多いが、気持ちはせぼじ込めていない。

めんどくさいしね。

今日はスペゲティが豊富だな。

その割りにはサラダが少ねえじゃないか。

こりゃあ、料理長に注意しないとな。

などと考えている内に、俺は皿にサラダ5人前、ご飯7人前、味噌汁10人前を取った。

サラダはやっぱり水菜だな、と呟く。

「左様でござりますが、でしたら、水菜の栽培も致しますか？」

「お、爺いいねえ。それ採用。」

爺、俺の良き理解者。

母さんや父さんよりも俺のコトを分かつてくれる。

大切な人材だ。

「泰世様、お時間でござります。」

ん？ もうそんな時間？

至福のときは過ぎるのが早いねえ。

身支度を済まし、無駄に大きい門をくぐつて、学校に向かった。

いや、反対方向に向かった。

ある奴を迎えて行くためだ。

おっと、また話がそれてしまつたな。

学校はそんなに遠くない。むしろ近い。

徒歩10分ぐらいで着くから、近いんじゃない？

他愛もないコトを考えていると、ある団地の前に着いた。

俺は大きく息を吸い込み、

「志流真あ！」

大声で叫んだ。

「い、今行く！」

どうやら俺の声で起きたらしい。

完璧に寝顔だつたし。

女ならそういうとこ、見てみたい気がするな。

暇だから携帯をいじる。

最近は携帯小説にはまつていて、これが泣けるのよ。ホントに。  
で、今も泣いているわけであって、見られたくないんだけども、まあ、溢れだして来るわけですよ。

人間って、めんどくさい生き物だな、とつづく思うよ。

「ううす。」

「おはよーーふあ。」

えーとこつらは、いつがみいだ入上威<sup>アサヒ</sup>装矛アサヒガマと、彼女の麦澤瑠羽那むぎわらるひなつつて、俺の  
幼なじみ。

仲睦まじきカップルである。

「わりい、遅くなつた。」

やつと来たか。

時刻は……、アレさえしなかつたら間に合ひつな。

志流真にだけやるかあ？

「何笑つてんだよ。」

おつと志流真につつこまれた。

どうやら、無意識の内に笑みがこぼれていたようだ。以後、気を付  
けないと。

さて、アレとは何か説明しよう。

簡潔に言つと、首筋を殴つて失神させる。

ただそれだけ。

簡単だら?

こいつはいじつて本氣で樂しいからな。

いじる側としても、こいつはいじられる人材の中でも、まさこ一〇  
〇年に一人級の逸材だよ。

まあ見ててみな……

「あ！ 志流真アレ！」

「えつ？ なん。。」  
ぼで！

ああ、顔面からコード派手に倒れたな。

それぐらいが丁度いいがな。

かで、ここつづりするかなあつと。

とりあえず、放置か？

「あー行けよ。」

「行くぞ。」

…放置で決定らしいな。

いやあ助かるね。

俺が責められても、民主的に多数決で決まったのだからしかたあるまい。

と言えばいい話になる。

志流真をほつて俺らは、いたつて普通に、学校に着いた。

結構めんどくさいなあ、授業。

あーサボるかあ。

最近は暖かいから、猫な俺でも割りと、過げじやすくなってきたし。

屋上は……、寒いか。

何だかんだ言って、この学校谷間にあるから風強いんだよな。

一時間目は、国語か。

大人しい池原恭子先生（29）だから、暖かい教室で寝るかな。

成績とかどうでもいいしな。

机に躰を任せて30分。

俺は一睡も出来なかつた。

というのも、池原の野郎、俺ばかり当てやがる。

「この歌は何句切れですか？　じゃあ本多君。」

また俺かい！

「3句切れです。」

「はい、そうですね。まあ分かつて当然ですね。」

うわ～嫌味かよ。

俺印象ぜつてえ悪いわ。

その後も何かと当てられたやつぱり一睡も出来なかつた。

とはいへ、毎休みまでずっと寝ただけどね。

購買まで歩くのめんどうでいいし、毎は食べずにて居ようかな。

なんて俺が考えていたら、最高の相棒が、やって來た。

「はい、泰世、カレーパン。」

「お、祐大サンキュー。」

あ、じいつは、俺の家のお手伝いさんの子どもの村中祐大。

親友と俺は思つてゐる。

多分祐大も思つてゐると思つ。

いや、思つて無かつたらぜつてえ殺す。

カレーパンは70個あつて、結構種類が豊富で、そこそこ美味しい。

「なあ、泰世。」

「はん？」

食つてる途中に話しあれると、少し困る。

「俺……、アイツのコトが好きで好きで、狂っちゃまこそうだ。」

ワックスで、シンシンにしてある頭を両手で抱えて、うつむいた。

「河か？」

「ああ、河だ。」

やつぱりか。

「ん……？」

俺は何気無く見た先にみんなで仲良く食事をとっている、河二郎、河中島千沙がいた。

河は明るく美人で、みんなに好かれている。

人望が厚くいい奴だ。

話したこと無いけどね。

まあ祐大が惚れてしまつのはよく分かる。

しかし、ペチャにも程があるだろ。

「俺はペチャ好きだ。」

だとよ。

人の好みだからつっこみはしないけど、やつぱりこは欲しいよな？

## N o i ハゲはいじ子息様？（後書き）

つまんないよね！ 書いててつまらないもん。先が思いやられます。  
・・（）・・・・。 感想、注意点とか待ってます

## No.2 ハゲピンチをチャンスに（前書き）

かなり短くしてみました。初めは800文字で止まつてましたが、1000文字行ってよかったです

## No.2 ハゲピンチをチャンスに

つー訳で、前の続きを言つと、せめてこは欲しいって奴だけ、訂正、Dは欲しい。

欲望の塊だぜ、俺は。

さあて、本題に行きたいと思いまーす。

祐大は河こと河中島千沙が好きなわけで、俺は祐大を応援したいと思つてゐる。

そんな訳で、だ。

俺は今、女子の軍団の中央こゝりの河の田の前にいる訳で、なんつーか視線が痛い訳で、

簡単に言つと、こけた拍子に河のスカートをずらしてしまつた訳で、

あ、

「訳で」が口癖になつてゐるし。

そんなことより！

一刻も早く弁解しなければ……。

「その～、あれだ。不慮の事故つて奴だ。」

じい——。

うわあ、一人も信じてねえ！

これは流石の俺も堪えられねえ。

どうする？ 土下座か？

「もう、いいよ。」

不意に今まで黙っていた河が言った。

「……」

そこまで、俺に何かしたいのか？

それとも、何かさせたいのか？

複雑な気持ちが俺の頭を制圧する。

「ただし、条件があるわ。」

「ゴクッ。」

唾を飲む。

周りからまばらとした空気が漂つ。

若干の間を取つて……、

「私達と今度の日曜日デートしてもらいます。」

「 「 「ええーー?」 」 」

女子に混じって、俺も言った。

罰と言つよつゝに褒美に近いんですけど……。

「メンバーは貴方の友達1人と、私の友人1人。」

ほう、ダブルデートですかい。

ま、相方は祐大で決まったな。

「1つ聞くぞ。」

「何?」

「もし、俺が醜い獣になつたらどうするんだ?」

「貴方にそんなこと出来るの?..」

ハイ。

出来ませんよ。

つーか、河つてこんな性格だったたつけ?

もっと大人しかったような……。

放課後

帰りは祐大と2人で帰っている。

まあ、話す内容は決まっているが。

「マジで？」

言った瞬間、祐大の瞳が煌めいた。

純粋なんだな。

いや、嬉しいよ。

純粋で。

腹黒い奴なんて嫌だし。

「とりあえず行けるんだな？」

「当たり前だ。」

よし、これで後は日曜を待つだけだな。

くつくつく。

楽しみだぜ。

## 翌日

祐大からの大至急のメールが届いた。

内容には驚かされた。

『泰世、聞いたか？ 相手は河と水瀬なんだって！ あと、威<sup>アラマサ</sup>ツルのカップルも来るらしいぜ。』

という内容だった。

どこのが驚くかつて？

水瀬だよ。

水瀬つてのは、チョー美人で、チョー巨乳で、チョー成績良くて、  
チョー性格がいいんだ！

名前も水瀬円まどかなんだぜ？

まどかつていう響きがいいと思うんだよ！

こりやあ、楽しくなりそうだ。

## No.2 ハゲピンチをチャンスに（後書き）

秋つて寒いですね。ますます家に籠っちゃりますよ。・。  
・。・。・。お陰で小説書けますがね  
（）

## N o . 3 ハゲテート（前書き）

いやあ、疲れたですよ。動物園ネタなんて、久しぶりだからですかね。

話が変わりますが、最近寒いですねえ。

もうすぐ、好きな人の誕生日なんですよ。因

みに（・・・）ももうすぐなんですね。

告ろうか迷つてんですよ。つー訳で、いつか、誕生

日ネタ考えてみます。

話反れまくつてすんません。じ

やあ見てください。

## N O · 3 ハゲテート

運命の日の朝。

我が家では、パーティーするらしく、かなりの量の日本料理を作っている。

寿司、天ぷら、ソバやたこ焼きなどか大広間に並べられていて、どれも美味そうだ。

思わず、ヨダレが溢れ出でくるぜ、コンニャロー。

これなら俺もパーティー出たいし！

もちろん食べるだけだけどね。

が、今は急がねえとな。

祐大が待ってるから。

「泰世。間に合わんぞ。」

「わりいわりい。」

予想的中！

長い付き合ひだと、心が読めるようになるんだな。

「爺ー、車頼むー。」

「もう用意は出来ております。」

流石は爺だ。

まさに意志疎通だな。

デート会場は近くに新しく建てられた、動物園だ。

そこそこ人気があるらしいが、行ったことがない。

確かデート用に作られているらしいが……。

「着きました。ご子息様。」

つー訳で到着。

結構広いな。

思っていたよりも何倍もいい感じだ。

入場ゲートの前まで行くと、きれいに着飾った2人が立っていた。

2人共に可愛い。

特に水瀬の白のワンピースつてのが、清楚な感じが出ていて可愛い。

隣の河も黒で統一されていて、大人の感じが出ていて美しい。

いやあ、マジで「褒美みたいだわ。

「待つたか？」

「つづん別にだよ。」

と、満面の笑顔で水瀬は言った。

一瞬、ムラムラしたんだが、俺だけだろうか？

いや、一度見てみる。

絶対にムラムラするぞ。

それは置いといて、俺たちは最初にペンギンを見に行つた。

可愛いペニンギン達がペタペタ歩いていて、マジで和むわあ。

「可愛いね。」

「だね！」

全く分かりやすい奴だ。

声が裏返つてるよ。

「本多君は動物好き？」

「え？ あ、まあそれなりに好きかな。水瀬は？」

あまりの不意討ちに、声が少し変だった。

つてか、惱殺スマイルなんですけど。

「私は大好き。だって可愛いんだもん。それと、円でいいよ。」

ぐはっ！

またも惱殺スマイル！

これ以上されると、制御出来なくなつて暴れだしそうだ。

なんて考えてこらへりちこ、河と祐大のペアはかなり先に進んでる。

「置いてかれたね。」

「だな。」

さて、追い付くべきか否か、どっちだ？

「…………。」

「…………。」

長く重い沈黙。

これは最悪だな。

何か話題を……。

「あの、」

「あの、」

「あ、はい？」

「何？」

「うは！」

同じタイミングって、かなりベタなんですけど。

こんなことあるんだな。

マンガとかドラマとか小説だけと、思つてたよ。

あまりいい雰囲気とは言えない。

この苦境をじう乗り越えようか。

やつぱ、何見るかとかで乗りきるしか無いな。

「ライオン、見に行かない？」

「はい。」

うし。

作戦成功。

だが、精神的ダメージが危険値まで上がっている。

マジでヤバいわ。

着くとライオンたちは、お昼寝、いや朝寝をしていて、ピクリともしない。

なんつーか、チョータイミング悪いんですけど。

「どこ行く？」

「蛇がいいです。」

蛇か、爬虫類が好きなのかな？

ライオンから蛇がいる、蛇の館は割と近くにあって、楽に行けた。

中には各種類の蛇「」と、「仕切りがあり、ソファーが一つ、クッションが二つあった。

データ用とほこりアコヒののか。

なかなかやるなあ、これは流行りそうだ。

うーん、それにしてもどーも空いてないな。

これじゃあ、見れないじゃないか。

折角来たのに……。

「本多君ーーーーー、空いたよーーー。」

「お、おうーーー。」

どいつもから、入り口に近いところが空いたらしい。

笑顔の円が大きく手を振って、このかしつけと催促していた。

「」のシーンを永久保存番の写真に撮つておきたい。

なんつってな。

そこまでは要らないな。

「」の蛇大きいねえ。」

「だな。」

見た感じ、6メートルはある、かなりでかい蛇が、一匹いた。

でも、その蛇、大きく口開けて、牙でガラスに穴開けてるんですけど

ど。

やばくないっすか？

いや、ヤバイよね。

絶対にヤバイよね！

「チクチクして気持ちいい！」

円メツチャ笑顔で、貫通した牙を触ってるんだけど、危ないよね。

パキッ！

ひび割れした……。

「円！ 逃げつぞ！」

「アハハハ。」

完全に自分の世界入ってるし。

「行くぞ！」

無理矢理、円の手を引いて、蛇の館を出た。

俺たちが出た後、蛇の館から悲痛な悲鳴が、聞こえてきた。

御愁傷様です。

さて、心を切り替えて、次のところに行こうか。

「蝙蝠がいいな。」

んー、円って、可愛いけど、何かがずれてるよな。

気のせいだらうか？

蝙蝠の部屋は、限り無く大きく、とてもなく蝙蝠の数が多かつた。

蝙蝠の部屋は、かなり暗くて、全種類の蝙蝠を、同じ部屋に飼っていた。

中には花を食べている蝙蝠や、餌用の蛾を食べている蝙蝠もいた。

「近くで見ると目が大きくて、可愛いね。」

うん。

確かによく見ると、目が大きく、可愛い。

イメージとは大違った。

もつと変な顔してると思っていた。

鼻も豚みたいで可愛い。

「ゴンー。

「ゴン！」

突如、ガラスに体当たりしだした。

ちょっと待て。

中で何が起きてんだ。

「痛そり……。」

「だな。」

ミシー

今、とうとうガラスにヒビが入った。

さうして蝙蝠は、勢いを増していく。

うーん、今日はストライキが多いな。

「円、逃げるぞ。」

「う　　、あ。」

時既に遅し。

ガラスは派手に割れて、無数の蝙蝠が一気に雪崩れ込んできた。

蝙蝠の部屋に居た、カップルたちはギヤー、ギヤー叫び、逃げ惑つた。

「円ー。」

「本多君ー。」

俺たちは離れ離れになり、蝙蝠の群れに襲われた。

「はあ、はあ、はあ。円……。」

気が付けば、俺は外に出でていた。

空には無数の蝙蝠で覆われていて、空が黒くなっていた。

多分野生の蝙蝠も合流したんだろう。

動物園上空全域が真っ黒だ。やつかいな「円」になつたな。

とつあえず、円を探さなきや。

俺は逃げる人を避けて進み、蝙蝠の部屋の周りを探し回つた。

何周ぐらいしただらうか、疲れはてた俺は、ベンチを見つけ、座つた。

「泰世あー、びついたんだよこなんどー。」

「ビーしたのー?」

隣からとても聞き慣れた2人の声がした。

「威装矛に瑠羽那あ。」

そこには、威装矛と瑠羽那が手を組んで、ラブラブな雰囲気を、醸し出している。

「居たんだ。」

「うわ！ ひでえー！」

「ひどい〜〜〜。」

なんつーか、やつにくらいな、じこひが。

「怒んなって。といひで田見なかつたか？」

「水瀬か見てないよな？」

「う〜〜ん。見てないよ〜〜。」

「あつ！

「どこ行つたんだよ。

「分かつた。それじゃあ、デートしてくれ。」

再び、探しに出た。

後ろで威装矛と瑠羽那が、何か言つてたから、一応手を振つといた。

相変わらず混乱が続いている。

上空の蝙蝠はどんどん勢力を増やしていく。

どうしたモノか。

しかも、数100匹は人を襲つていて、大勢の人が怪我をしている。

「本多君————！」

真左から円の叫び声がした。

声がした方へと全力疾走した。

そこにせむりの蠍に囲まれて、

楽しそうにしている円がいた。

絶句だ。

「…………か？」

「あ、本多君！」

そう言ひて、蝙蝠を引き連れて、じつちに来た。

何で言えば、良いんだろう?

「この子達ね野生から無理矢理、連れて来られたんだって。」

ハイ?

意味がわからないんですけど……。

キヨトンとしてこる俺を見て、円は楽しきり、「私ね、昔から動物と話が出来るんだ。不思議だよね。」

と言ひて笑った。

かなり深刻なコトじやないか!?

もつと早く言ひて欲しかったよ。

## No.3ハゲテート（後書き）

動物園ネタが終わったらキャラクターの紹介をしたいと思ってます。

No.4 ハゲハゲハゲ（前書き）

短めですね、イヽヽヽヽ

## No.4 ハゲハゲハゲ

「とつあえず、蝙蝠を落ち着かせん。」

「無理だよ。だって、言ひこと聞くのこの子達だけだもん。それに……。」

少し暗い表情をした。

そういうや、こんな顔初めて見るな。

「可哀想だよ。」

予想外の返事だった。

また絶句した。

そこまで考えていたなんて思つてもいなかつた。

「優しいんだな。」

「だつて、元々は野生なんだし、野生動物は野生に居なきゃダメなんだよ。」

変に説得力があり、俺は心を打たれた。

感心、というよりは尊敬に近い気持ちが芽生えた。

「他の動物たちもそうなんだって。」

「……なんてコトをするんだ。

「JINの管理人は、鬼なのか？」

「じゃあ、そいつらに他の蝙蝠に逃げろ、って伝えてくれ無いか？」

「うんー。」

円にいつもの明るい笑顔が戻った。

「

聴いたことの無い言葉を口にする円。

すると蝙蝠たちが、空高く飛び上がつて行つた。

徐々にだが、蝙蝠が逃げ始めた。

バン！

突如の銃声、少数武装した大人。

空から真っ逆さまに落ちてくる蝙蝠。

子どもの泣き叫ぶ声。

その場は騒然となつた。

「 テメエ！」

無意識の内に大人に殴りかかっていた。

「止めなさい！」

他の大人が止めにかかるが、そんなの関係ない。

俺は手を押さえられても、躰を掴まれても、殴り続けた。

俺は突き飛ばされた。

携帯を取り出して爺に連絡を取った。

「爺、H・O・T・A・を出せ。」

「分かりました。」

爺の対応はいつも通り早かつた。

連絡を取つて5分、黒服の頭がツルツルなおっさんたちが、爺を先頭に武装して、やって來た。

「おっさんたちが

H · O · T · A ·

正式名は

ハゲたオッサンたちの集まり

俺が作つた本多家の特殊部隊だ。

「アイツらを殲滅せよ。」

無数の銃声が響き渡る。

……もちろん麻酔銃だ。

人殺しだけは絶対嫌だからな。

大人たちはぶつ倒れた。

「蝙蝠はどう致しましょつか？」

煙が上がっている銃口をかっこよく吹いて言った。

逃がせばいい。

「そうですね。」

爺は笑顔になつた。

そうそう、爺は動物が大好きだったんだ。

優しそうなハゲ。

それが爺の容姿だ。

蝙蝠たちが逃げ、平和を取り戻した動物園の午後。

俺たちは威裟矛・瑠羽那と合流した。

「大変だつたねえ。」

「だあ～ふへえ～。」

「瑠羽那あ、欠伸も可愛いぞつ！」

……、見事な世界の作り方だ。

見習いたいものだな。

それはまあいいとして、デートは順調に進んでいた。

## No.4 ハゲハゲハゲ（後書き）

マジで寒いですねえ（本日2回目）。学校で凍えながらコクの曲聞いてます。後書きメンドーなんで終わります。

## No.5 ハゲ、食つて、くしゃみ（前書き）

いやあ、塾や宿題で更新が出来なかつたんですね。塾は女子ばっかりで、ハーレムなのか違うのか……それが更新出来なかつた言い訳です（笑）

## No.5 ハゲ、食つて、くしゃみ

そう、順調だつた。

あれから5時間後、俺たちは夜の街をブラついていた。

まだまだ夜は肌寒い春先、温かいものでも食べようと話した結果、カニ料理を食べることに。

「一番高い鍋20人前とカニの刺身30人前。ドリンクは酒以外全部定期的に持ってきて。」

あまりの注文の多さに驚き戸惑つ店員さん。

そして、カニだ、カニだ。と踊る威裟矛と瑠羽那と円と裕大。

個室で良かつた。

しばらくして、何人も店員さんが来て、カニを大量に持ってきた。

ますますこの場が盛り上がる。

マジで恥ずかしいんだけど…………。

「さあ！ 食つやーーー！」

そう雄叫びを上げて、威裟矛が一気に刺身にかぶりつく。

負けじと裕太も何本もかぶりつく。

結局はみんなかぶりついて、鍋のお世話を誰もする気は無いらしい。

おーい、鍋は誰がするんだ～～？

「鍋ふあ～～。泰世おへえふあい。」

食べながら欠伸をしてしゃべる。

どれか一つにしろ！

「ふあつてえ～～。」

……はあ、俺がやるかあ。

腹減つてるのに。

カニを軽く沸騰したお湯にくぐらせて、少し白くなったらあげる。

それをこごつらが遠慮なくいたいらげる。

それの繰り返し開始20分、俺はまだ一本も食っていない。

つたく、俺もお人好しだよな。

「本多君も食べれば？」

俺がカニをしゃぶしゃぶしていると、隣から円がカニを持って来て

言った。

ああ、根が優しい女は優しいんだな。

あつちの女とは違つて。

「ふあい、威裟矛アーン。美味しい？」

「はむ。超うまい。お返し。アーン。美味しいか？」

「美味ふい～。」

.....。

さて、裕大はどうかな？

「うめえ！ 河のしゃぶしゃぶしたカニうめえ！」

「ほんとー？」

.....。

ああ～～、裕大たちはいつの間にかラブラブだし、威裟矛たちも超ラブラブだし、なんつーか俺ら場違いみたいだな。

「は、ハイ、本多君。」

「あ、サンクス。うんうまいー。」

そもそも無せそうだ！

力二つでこんなに美味かつたんだ～。

え？ 円の効果？

そうかもなあ。

1時間後、俺がしつかりと全て食べて、代金を払って店を出た。

「瑠羽那、帰るつか。」

「ふあん。」

「河、帰ろ！」

「うんー。」

ダブルペアは手を繋ぎ、仲良く帰つていった。

かなり羨ましいんですけど……ー

あー2人きりだな。

送ろうか？

「え？ あ、うん。ありがとう。」

この笑顔に惚れてしまったかもしれない。

それはさておき、俺ら2人は円の家に向かった。

会話など無い。

ただ静かに歩くだけ。

「雨……。」

いきなりの雨だった。

次第に雨足は強くなり、仕方なく雨宿りすることに。  
止むかな?

「やんて欲しいね。」

可愛らしく首を傾けていった。

つてか、止まないとパーティー中の爺を浮ふことになるから、是が  
非でも止んで欲しい。

ザ―――。

俺の願望はあっけなく、打ち碎かれた。

という訳で1時間過ぎた訳なんだが、雨足は強くなる一方で、止む  
気配が寸分も無い。

もう爺を呼ぶか？

半分諦めかけた時、少しだけ兩足が弱くなつた。

行くぞ！

「うんー。」

満面の笑みだつた。

俺は円の手を引いて走つた。

結構速めこ。

「あっ。」

「……………ありがとう。」

こけかけていた。

タッチの差（？）で円の手を掴み、抱き寄せた。

あー、これはワイヤセッ行為に当たるのかな？

「……………うう、普通の行為だよ。」

本当に円は優しい。

普通、悲鳴をあげないか？俺が女なりあげるな。

間違いなく。

まあそれは良いとしてだな、俺たちがもつらじで田の家に着くって時こ、急に歛足が強くなつた。

俺は上着を脱いでソシと田に差し出した。

「う、うめんなさー。」

「ういと頭を下さた。

良こつて。

氣に付くなんよ。

これが男の役田なんだからな。

そんなんなら田の家にへりておれになつてこた。

薄着だつた田は、ブリーフやパンツやらが、透けやけつてゐるから、田のやつ場に困つた。

と黙つても、やつぱり物に田が行つてしまつのは、男の性つて奴だな。

「今日はありがとう。またね。」

家中に消えてこべ背中を見守つた。

翌日

はつ

はつ

ハックショーネン！！

飛び出た鼻水をティッシュで拭く。

完璧に風邪ひいたな、こりやあ。

## No.5 ハゲ、食つて、くしゃみ（後書き）

リアルに風邪ひきました。（涙）鼻水が止まらないんですよ。（泣）奇遇にも見てくださった人も見なかつた人も風邪には気を付けましょうね。（泣）

## No.6 夏の文化祭前のハゲ（前書き）

関係ないですが、リアの桃内士郎（？）氏がリレー小説を書くらしいです。詳細は上記の先生の作品を見てください。

## No.6 夏の文化祭前のハゲ

そろそろこの学校のコトでも紹介するかな。

みやびざんさんねんめいじゅういちがくこうりゅう  
県立雅山間高等学校

県内トップの学力を誇っている。

生徒総数は約1000人

野球部は甲子園大会常連校で全国制覇もしたこともある。

学校行事は四季の文化祭、修学旅行、クリスマスパーティー、卒業旅行等々。

俺は帰宅部だ。

つーか、威姿矛以外俺の周りの奴みんな帰宅部なんだけどな。

さて、どうしてこんなことを言つているかと言つと、だな。

あと一週間で夏の文化祭があるんだ。

それの前置きみたいなをしてたつて訳。

さあてと、そろそろ会議だな。

12分に寝たから起きるかな。

教室

教卓に双子の姉、学級委員長の杉里眞那と双子の妹、副委員長の杉里実沙綺がきれいに並んでいる。

「はあい、という訳で模擬店は執事喫茶に決まりましたあ。拍手～」

パチパチ……

拍手をしたのは女子の中の数名だけだ。

ちょつと待て。

まだ多数決すらしてないぞ。

その前にまだ会議始まつて1分と経っていないぞ。

「気にしないで。眞那姉のコトでしょ？」

あ、そうだなあ、眞那姉のコトだもんなあ……つて、おいー。

危づく流してしまつところじゃないか！

ヤバい、ヤバい。

いつもの調子で行かれると確実に執事喫茶になっちゃう。

なんとしても阻止しねえと……。

「しつもーん。」

お、志流真が手を擧げた。

がんばれ～。

「メイド喫 。」

「死んでください。」

「志流真あ、1回地獄行く？？」

……瞬殺かよ！

もっとがんばれよな！

しかし、相変わらずあの双子は強いな。

悔しいけど、阻止は無理だな。

「はあい、泰世と裕大と志流真執事けつてえ～。」

……強制かい！

「眞那姉なので。」

そうだな、眞那姉だからな、仕方無いが。

もはや対応が面倒くやー。

「はあい、女の子は料理係ねえ。あと材料調達も女の子ねえ。」

んーかなり進行が早いな。

さあて、俺は執事らしいが具体的に何をすればいいのかな?

「女性客に快楽と癒しを『えなさー』。」

え…………？

快樂を与えていいの?

「一種の比喩と繋つて下さー。」

ああ、比喩かあ。

納得納得…………するかボケ!

てかその前に担任は何をしてるんだよー?~

「中止センセー? ああほりソコで生徒の成長を見てるじやんー。」

「呼んだ?」

そこには椅子に座つて、眠たそつて……いや、寝起きの顔で見てい  
た。

確実に寝てたな。

担任がこんなんだから双子が実権を握っちゃうんだよな。

「何か言いましたか？」

笑顔で言う。

……笑顔が怖いなんて初めての経験何ですが……。

「センセーあとは後日で良い！？」

「…………え？ あ、はい。」

完璧に寝ていた中山先生は少し驚いた顔をした。

「はあい、かいさあん！」

眞那の声と共に一斉に教室を駆け抜ける人影が一つ。

……中山先生である。

何でか知らねえがいつも誰よりも早く教室を出る。

戸締まりが嫌なのか？

そんな子どもみたいな理由な訳無いか。

「いえ、そういうのですよ。何でも1人が嫌みたいですね。」

……やうなのが。

意外と子供もなんだな。

「わかったよと帰つてから。帰る時間が遅くなりままで。」

はいはー。

分かりましたよ。

やれじやあ歸りました次話で会いましょう。

……我ながら変な終わつただ。

## No.6 夏の文化祭前のハゲ（後書き）

寒いですね。朝死にそうですね。なんだか毎回寒いって言つてるような……。インフルエンザシーズン、受験前だからひかないように、ガンバラナイト。

## N o . 7 ハゲしい文化祭 前編（前書き）

イベント大好き、豊です。といつ訳で、二話ぐらいに分けて文化祭を。

夏の文化祭当口になつた訳なんだが、男子はあの後全員執事やらしされることになった。

反対する奴もいたが、志流真みたいに瞬く間に、駆逐されていた。

で、今はクラス全員で模擬店となる教室で円陣を組んでいる。

「一番儲けてえ、明日の夜に飲み会やるうござー！」

「眞那姉に従えば、楽勝ですから逆らわない様にしてくださいね。」

「…………」

といつ感じに盛り上がり、女子はキッチンとなる所へ。

男子は控え室で待機して開場を待つた。

「例年通り客は多いみたいですから、儲けて下さいね。」

などと実沙綺が各執事にい回つている。

いやあ、緊張とかじやなく、羞恥心がかなりあつて、嫌なんすけど。

左隣の志流真は足震えてるし、右隣の裕大は仲良く河と談笑してるし、なんだか嫌だな。

普段執事を雇つてゐるからかな?

そんな俺を無視して、開場時間は刻一刻とせまつている。

そして、

「さあ、開場1分前だよお。入り口前に並んでえ。」  
続々と執事たちは入り口前に並んでいく。

一応俺も並んだ。

とうとう、この時が来た。

「お帰りなさいませ。お嬢様。」

一斉に頭を下げる。

客さんは予想以上にいた。

それも美人ばかり……。

「お嬢様、こちらへ。」

基本、客は1人1組で1つのテーブルに案内する。

そう基本は、だ。

「はあ！？ 何で俺らが離れ離れにならないとダメなんだよ！？  
おかしいだろ！？」

怒りで椅子を蹴飛ばす威裟矛。

それを何故か、若干頬を赤らめて、欠伸をして見つめる瑠羽那。

ああ！ もうやつてらんねえ！

なんだこんな口上になるんだよー

てか、威裟矛は怒りすぎだろ！

営業妨害だろこれは！

「お止めください子息様！」

あー、ひ、かなり困つてゐな。

ここは俺の出番だな。

「威裟矛様、椅子を用意させて頂きますので、どうかお静かに御願  
いします。」

な、な、な、志流真あ！？

あいつ、爺みたいな髪はやして、髪の毛も白くして、どうしたんだ  
！？

しかもやけに落ち着いてるしー。

「し、仕方無いな。志流真に免じて許してやるよ。」

落ち着きを取り戻す威儀。

「 すげえ迫力だつたあ。」

「 その前に志流真すげえ。」

「 マジで驚いた。」

「 今度、執事として、雇おつかな。」

「 などと、俺が考へてゐるうちに店内にはかなりの客が入つていた。」

「 志流真さん、3番席指名入りました。」

「 焦りながら志流真が駆けていく。」

「 志流真さん5番席指名入りました。」

「 また駆けていく。」

「 志流真さん7番席指名入りました。」

「 すげえ人気じやないか！？」いつあかなり金儲け出来るな。」

「 つーか、かなり暇なんすけど……。」

「いや、その前に爺みたいな志流真が何故あんなに指名が入るんだー？」

「 裕大さん8番席指名入りました。」

裕大がゆっくりと歩いていく。

「裕大さん12番席指名入りました。」

……いやあ、繁盛するつていいねえ。（泣）

悲しくなった俺は裏に回り込み、指名表を見た。

指名数トップ志流真35、2位裕大27、3位伊志田光成20、俺、0。

……どうじょうか。

誰か俺を指名してくれ。

そんな俺を横田に忙しそうに働く志流真たち。

……ちよつと羨ましい。

誰でもいいから客を分けてくれえ。

「泰世あー!? 暇そおねえ。ちゃんと働きなさいよー。」

働きたくても指名が無いけりやあ働けねえだろー！

「なんか文句あるのー?」

……はい、すいませんでした。

で、何をすればいいんだ？皿洗いか？

「泰世さん、1番席指名入りました。」

「だつてえ。」

そう言つて眞那は後ろから突いてきた。

誰かは知らないけど指名ありがとー！

「お待たせしました、お嬢さ　円あ！？　ビバーバーバー！」

1番席にまーごーと惱殺スマイルを振り撒く円が座っていた。

「あ、いや、千里が来たいって言つたから着いてきたら、本多君の名前があつたから……。」

俺に会いに来たんじゃなくとも指名ありがとー！

けがの功名つて奴？

「それはちょっと違うと想つ……。」

まあそれはいいとして、何か食べる？

「じゃ

「泰世あー、お嬢様に対しても態度は何！？　身分をわきまえなさいー！」

「眞那姉は地獄耳だから何でも聞こえるので、無闇に変なこと言つ

と、地獄に落ちますよ。」

「いや、いやだ。

つてか、二つの間に居たんだよ」「うーん……

「じい——。」

……

眞那の殺氣がおおいに感じられたので、仕事でもじょひ。

お、お嬢様、何か食べますか？

「じゃあ、カレーライスとコーヒー、ブラックで。」

かしこまつました。

……なんか変だよな。

爺たちはこいつもこんな思いをしてくるのか？

それならうしょと氣を使わないとな。

「お待たせしました、お嬢様。」

出来上がったカレーライスとコーヒー、ブラックを置いた。

円はカレーライスを見つめて、一口。

……

「おいしい！」

おおー！

俺が作つた訳じや無いけど、なんだか嬉しい。

じいー、とカレーライスを小さな口で食べる円を見つめてしまつ。

「何かついてますか？」

あ、いいや。

何もついてないよ。

……「れじゃあ純愛小説になつちまつ。

なんとしても止めなければ……。

「泰世ちゃん、2番席指名入りました。」

「おおー！？」

いきなりだな。

では、お嬢様失礼ですが行つてきます。

「行つてらつしゃい。」

笑顔で送つてくれる円。

じつこつのもいいな。

「泰世ちゃん、9番席指名入りました。」

「泰世ちゃん、3番席指名入りました。」

次はあつちか！

「泰世ちゃん、6番席指名入りました。」

今度はあつちか！

昼休憩

はあ、はあ、はあ、はあ、疲れたあ。

ありえねえ、1時間で40以上指名なんて、ありえねえ。

「みんなあ、いいねえ、早くも黒字だよお！ まあ欲張らずに午後はランキング上位5名は抜けていいからねえ。」

「お皿いり飯は他店で適当に食べて来てください。ぐれぐれも店の物

やつたあ！自由だあ！ギリギリ5名枠に入れたあ！神様、仏様、お嬢様、ありがとーーー！

No.7 ハゲしい文化祭 前編（後書き）

寒いですねえ。布団から出たくないですよ。風邪気味だし……

No.8 ハゲしい悲劇（前書き）

若干エグい表現があります

## 20・8 ハゲしい悲劇

あーーー、そのなんだ、さつきは調子ぶっこって、す、す、す、す  
いまて……すいませんでした！

……「わあ！」

「ちやんと謝りなさい！」

教室から逃げたそつとする俺を眞那が、なんかカウボーイが使う繩  
で首に引っかけ、思いつきり引っ張つて止めた。

もぢりん俺は咳き込みながら後頭部から倒れた。

チキシヨー、なんて強さだよ。

「泰世あ、もう一回されたいい？？」

丁重にお断り申し上げます、はい。

「あらあ、そお。や」

不敵な笑みを浮かべて絞めている繩を強める眞那。

なんで強める！？

「2人きりだねえ……。」

キャラ設定が違 う・

シンテレキャラじゃなーい！

眞那はシンシンキャラのはずがあ！

「これなら誰が來ても問題ないねえ……。」

と言つて、頬を紅く染める眞那。

「これじゃあ調子が狂つちまつ！」

「たとえ、ここで私が殺しても……ね。ウフフ。」

何い——！

待てえ、早まるなあ！

「貴方に死んで貰えればこりゃは楽に本多家を潰せるのですよ。」

実沙綺までえ！？

実沙綺は両手にナイフを素早く繰り出して、掌で回しながら近づいて来る。

それを冷たく見つめる眞那がゆっくり機関小銃をスカートの中から取り出す。

この2人こええ！

つてか死ぬなこりやあ。

「うううで、死んだら、悲しいぞ俺。

「刺殺か銃殺、どちらがお好みですか？」

「うだな……刺殺かな？」

「いやだよ。銃殺けつてえい！」

「うかあ、銃殺か……って意見の意味が無いだろ？が！」

「それなら初めから聞くなよな！」

「へえ～、そんな」と言つて良いんだあ。」

威圧感がたつぱりとある瞳とオーラで笑う眞那。

再び「へえ～！

ダメだ。

もう諦めるしか無いな。

親父、爺、お婆、イギリス留学中のまだ登場していない姉貴、そして皆、じんなといひで死んでしまいそうだ。

本当に悪いな。

「じゃあバイバイ。」

「バン！」

キーン！

不思議だな、痛くない。

即死なんだな。

「気が早いよ。本多。」

はい？ どなたですか？

死神さんですか？

「ばあか、伊志田だよ。」

「ちひつー！」

いやあ、田の前で何が起きてるか分からんですか……。

「田を開ける。」

え？ 田を開ける？

死んだはずじや……？

状況を把握出来ないまま田を開けてみる。

そこには立派な日本刀を両手に持つた美青年の伊志田光成が立っていた。

「銃刀法違反で現行犯逮捕する。」

「貴方も銃刀法違反じゃない?」

「俺は日本政府裏警察少年課長つて知らないか。」

「すごい人材がこんなところにいた!」

しかもチョークールだし、かなりのイケメンだし、甘い声だし、いいところしか無い。

こういう人間もいるもんだな。

新鮮な驚きだ。

さて、どうしたものか。

このまま伊志田光成に任せればいいのか?

それとも、

「とりあえず机で簡易な防壁を作つて下さい。」

わかった。

じゃあ後は任せた。

「か、完敗です……。」

ドスッ、と伊志田光成が倒れる。

床には伊志田光成が流したであろう、真っ赤な血が広がっていく。

……倒されるの早！

本当に課長さん！？

「じゃあ、貴方も死にましょうねえ。」

機関小銃を軽々と片手で構える。

力チャ。

死へのカウントダウンが始まつた。

「命乞いしないの？

お、しても。。。

「まあ、しても意味無いけどね。」

やつぱりそのオチにいくのか……。

まあ、定番だからな。

仕方がないか。

ああ。

「4

うう。

「3210」

ダダダダダダダ！

無数の鉛の塊が俺の躰を突き抜ける。

今まで流れていた生暖かい鮮血が少量宙を舞つ。

痛みで意識が薄れる中、背中から落ちていく感覚を覚える。

ガバッ！

吐血、そして着地。

「これで本多家は終わりました……わ！」

ザクッと実沙綺が持つているナイフが腹に突き刺さり、痛覚が躰中を走る。

そしてかき混ぜる。

内臓がぐちゃぐちゃと音をたてる。

痛いがまだ死んでない。

わざわざと死ねばこの痛みから脱出出来るの。」

「諦め早いわよ。泰世。」

しばらく聞かなかつたけど、確かに聞き覚えのあるこの声。

懐かしいな。

誰だっけ……。

「酷いわね。一緒にお風呂も入つた仲なのに。まあ仕方無いか、イギリス行つてたし。」

イギリス、声、一緒にお風呂……あ！

分かつた。

姉貴だ。

史上最凶の姉貴だ。

だけどどうしてここに居るんだ？

死ぬ前の夢か？ なら納得出来るが……。

などと俺が呟いていると、実沙綺が腹に突き刺したナイフをかき混ぜる。

激痛が走る。

「あはは！　夢ならいいねっ！　残念だけど、史上最凶の姉貴は来てるよ……」

目を閉じているのでどこに居るかは分からぬが、声の感じから、右側に居てそうだ。

「貴女も死にたいの？」

これは眞那の声だ。

「うふつ、貴女こそ死にたいのかな？」

少しおちゅくつていてるよつたーン。

この声の時、確実に人災が起こる。

例えば、死ぬとか。

「あ、あ、！」

眞那が人間とは思えない様な悲鳴をだす。

鼻、耳、口から血が噴き出す。

と、同時に実沙綺が大量に吐血する。

2人の悲鳴が響き渡る。

そう、姉貴には超能力的な物が生まれつきあり、姉貴がイギリスに

行くまで、それに苦しめられてきた。

「大丈夫……？」愛しの弟ちゃん。

少し声が震えている。

珍しいな、姉貴が泣くなんてさ。

俺の腹に姉貴がそつと顔を添える。

内臓と血が姉貴の綺麗な顔を赤く染める。

すまない……せ、俺死ぬみたした

「いやだよ、私は死なれたら困るんだから！ ねえ！ ねえ……」

徐々に薄れて行く姉貴の聞いたこと無い様な声。

そして、ヒヤリと冷たい涙が俺の腹に落ちる。

泰世あああああああー！ー！ー！ー！ー！

## No.8 ハゲしい悲劇（後書き）

寒いですね、はい。毎回言いつますよ。まあ夏になると暑いですね  
に変わりますが（笑）

No.9 恐い……ハゲ（前書き）

見た人感想等お願いします

と詫ひ妄想を眞那と実沙綺と一緒にしていた。

何故こんなことになつたかと言つと、眞那が突然、「泰世を殺したらどうなるんだあおなあ？」

などと呴いたのがコトの発端だ。

で、何故か俺まで妄想に付き合わされて、まああんな感じになつてしまつた。

姉は……まあイギリスに行つてゐるのは当たつてゐるのだが……、話した記憶が全く無い。

眞那曰く、

「勘よ、勘。」

だそつだ。

女の勘つて本当に当たるんだな。

さてさて、俺が死ぬと言つ嫌な妄想を終えた俺達は、何故か模擬店の外で待っていた円と合流して、昼飯を買い込み、立ち入り禁止の南館5階に続く階段前に来た。

何故立ち入り禁止のかは知らないんだが、噂によると……ここでは自殺した生徒の幽霊が出るらしい。

何人も見たらしいから本当だろ？

教師も誰かは忘れたが、見たらしいしな、信憑性も高い。

で、何故来たかなのだが、……眞那が行きたいと駄々をこねたので、仕方なく来たわけ何だが……

寒い！－ 寒すぎる！

まだ昼間だぞ！？

それなのにこの寒さ、まるで冬の暖かい時みたいじゃないか！－

それプラス、いつでも幽靈さん出てください、と言わんばかりの薄暗さとひんやりなど雰囲気が物凄く出ているんだが！？

まあ冷静に考えてみろ。

幽靈なんて居ないんだ。

「あー、泰庄がいたのね？」

「本多君？」

おつと、失礼。

どうやらボーッとしていたみたいだ。

階段の上を見ると3人並んで結構登つていた。

時々パンティがちらほり見えるのだが、言いつて殺されるので黙つておひづ。

鬼の表情をした眞那が階段から飛び降り、スカートが風の影響で、フワリと捲れて白色のパンティが丸見えになる。

のも束の間だつた。

眞那の上靴の底が目の前まで来て、そのまま顔面に直撃し後頭部から床に激突した。

つてえ！！　いきなり何するんだよ！？

「あんたがあエロイコト考えるからよー」

まだ乗り続いている眞那を押し退けて立ち上がり、階段を登り始める。

頭、特に後頭部が恐ろしく痛い。

どうしたものか……。

「アハハ、大丈夫？」

耳元で誰かが囁いた。

ああ何ともない。

ん？　今のは誰だ？

眞那はあんな声じゃないし、実沙綺も円も上の方だし……。

まさか……？

「アハハ、そのまさかだよ。」

また耳元で誰かが囁く。

いや、誰かじゃない。

確實に幽靈だ！

No.9 惡い……ハゲ（後書き）

寒すぎですねえ。毎日布団から出るの嫌ですよ。泣きたい。  
（）・（）・（）・（）  
・  
・  
・

No.10 死にかけハゲ（前書き）

今回は前回の続き的なモノです

「アハハ、君面白い。」

声は聞こえるのだが、まわりを見ても隣で怒りを静めた眞那が、ワクワクした感じの笑顔で階段を上がっているだけで誰も居ない。

自然と怖さから冷や汗をかいてしまう。

変に冷や汗をかいている俺を不思議に思ったのか、眞那が時折チラチラとこちらを見てくる。

上を見ると5階と4階の間の踊り場で立ち止まって、ピクリともしない2人がいる。

この声と2人を怪しく思いながら、俺は上がっていく。

上がりきった瞬間だ。

躰の自由が聞かなくなり、息もしづらくなり、何よりも、多少は聞こえていた雑音が、一切聞こえなくなった。

さらに田の前の階段は黒くなり、さっきまで足が着いていた階段も黒くなっていた。

これだけの条件がありながら不思議と、恐怖心はあまりなく、逆に悲しみがとても感じられた。

だ、誰なんだ！？

勝手に口走る。

もちろん返事は来るハズが……

「……で死んじゃった哀しき乙女、つてところかな？ アハハ」

あつた。

いや、あつてしまつた。

決してあつてはならないハズのコトがあつてしまつた。

だが、やつもさも言つたように恐怖心はない。

しかし一体この声はどうから聞こえて来るんだ？

どこの居ても聞こえて来るみたいだが……。

「私は壁に制服」と埋められてるから、何処からでも話しかけれ  
んだ！ アハハ、便利でしょ？」

な、なんなんだこいつはああああああああああああああ！？

と思わず言つてしまふ様な、実に変なテンションの少女だ。

少女……と叫つてもいいのだろうか？

「な、何あの娘……！？」

「幽靈…かしら?」

「本多君があの世に連れて行かれるのー?」

あーなんだか嫌な雰囲気になりそうだ。

「アハハ!! 君たち面白〜〜い! だあかあらあ……殺して、あ・  
げ・る。」  
うわあああ!

とうとうこの娘壊れちまた!

そう思った時だ。

壁から赤い煙を出してゆらゆらと揺れて浮かぶ赤い火の塊、俗に言  
う火の玉が無数に出て来た。

もちろん体が動くハズもなく、俺たちはただ立つことしか出来なか  
つた。

流石にこれには、死を覚悟したね。

俺諦め早いから。

なーんて、俺が思っている内にも火の玉は近付いて来る。

少しずつだけど、息苦しくなってきた。

窒息死と溺死は苦しいらしいなあ……一緒に。

かなり早いペースで諦めモードを繰り広げる俺を横目に、他の3人は必死に生き延びようと、頑張っている……様な顔をしている。

正直な話、身動きが取れない訳で、何も出来ないから何をしているのかが全く分からない。

「アハハ、終わりだによ。君たちの人生は。私の様にね！！ アッハハハハハハハ！」

姿が見えない少女的な幽霊の声鼓膜を突き抜け、脳内で響き渡る。と同時に痛覚が全身に感じられる。

今までで一番痛いかもしれない。

よくよく見ると俺の体に火の玉がいくつもと言つよつは無数にへばりついていて、ついているトコが痛熱くて、なんというか早く死んだ方がマシかも。

つて感じかな。

「本多君……本……多……君……。」

あああ！

とうとう円が力尽きて、床に倒れた。

「泰世の……バカ野郎お！ 私をこんなと……こりで……この小説から……存在を消すなんて……バ……カ……野……郎……お。」

ふう、やつと疫病神が死んでくれた。

「そのままのノリで行くと次は実沙綺か？」

「その通りですわ……して……やられ……ました……です……わ……」

やつぱりね。

大体そういうじゃないかなあつと思つてたよ。

で、最後に俺が一番痛めつけられて死ぬつてオチなんだろ？

わかってるよ……それくらい……な。

つて、早いだろ俺死ぬの！ 絶対に早いよなー？

あ……。

「バカ！ ここで泰世あが出できてえどうさんによおー！」

「死に価しますわ。」

「折角の1話全部を妄想に使おつとしたの」。本多君つたりー。」

はい、そうです。

円が行つた通り、全て俺らが模擬店回りしていく今した妄想ですり

ああ、俺に明日は無いなあ……はあ。

「ウフフ、今日は淫乱パーティーねえ…………！」

「眞那姉、淫乱では御座いませんわ。躊躇<sup>じつけ</sup>パーティーですわ。」

「それよりも闇鍋パーティーしようよーー？」

言いたい放題言いまくるひだりの女たち。

とりあえずここから逃げ出さないと……。

「泰世あ……逃げたらバーガールの姿で学校を隅から隅まで歩いて貰<sup>もら</sup>つからねえーー！」

はいいいーー！

俺に平和な日は来るのだろうか  
.....。

No.10 死にかけハゲ（後書き）

寒いですねえ。自分、髪型が坊主だから頭が特に寒いんですよ。  
帽子は似合わないんで、防げるものが何も無いんです！！ この気持ちは判る人にしか判りませんよね？

## No.11 ハゲしい… れん（前書き）

はーい眠いです。という訳で文化祭も終盤ですたい一・引き続き、駄文にお付き合いしてください？感想及び誤字脱字の指摘待つてまつ

## No.11 ハゲしい… セン

妄想で夏の文化祭初日を潰してしまった俺。

2日目であり、最終日でもある今日は、円と朝から2人きりで模擬店を回る約束をした。

そんなこんなで、ハイテンションな俺は柄にもなく下手くそなスキップをして登校している。

基本歌が嫌いだからスキップもあまりしたことが無かつたからな。

下手くそで当然だよな？

などと、自問自答を繰り返しているうちに、校舎は見えてきた。

約束の場所は校門前つてコトになつている。

……ワクワクが收まらねえ！

でまあ、校門に5分遅れて着いたのだが……円が居ない。

一体何処に？

しつかり者だから遅刻は無いと思つんだけど…。

「円搜してるでしょ？」

ん、まあそんなとこ。

何処からか現れた眞那にかなり適当に返事をする。

厄介なコトにならないように心の中で祈りつつ。

「円ならあ、さつき柄の悪い奴らに森に連れて行かれてたよ。お。

な、なんだってえー?」

それを早く言え!!

すぐさま俺は学校の敷地内にある森に向かった。

結構広いから深いところに行かれたら、見付けることが困難になる。

まずは森の周りを走つて見回る。

しかし誰も居ない。

焦りが積もつていぐ。

行くしかないか。

俺は奥に入りうとしたその時、

「だからあいつは殺れつってんだろ?が!… お前らぶつ殺すぞ!…  
あん!?」

ところ非常に聞きなれた声が奥から聞こえてきた。

あまり想像したくないあの娘の声が。

「し、しかしあ嬢様SPがいて……」

「そいつらも殺ればいいだろ？　が！　バカか、お前らはーー？」

「は、はーいーーー！」

あ、やべ、叱られてかなり凹んだ奴らがこちらに来るー。

黒服＆黒サングラスだから多分ヤクザだと思われる奴らの声がどんどん近付いてくる。

見付かったら確実に殺られるな。

咄嗟に茂みに突っ込んで隠れてヤクザが通り過ぎるのを待つた。

ブーン……

チク！

いっでええええええええーーー！

突如如何者かの攻撃に俺は、驚いて叫び、茂みから飛び出でしまった。

命運尽きたり……。

「……貴様！ 不意討ちとは… さては山波組の奴か！？ そうなら、死ねえ！」

銃を取り出した。

多分回転式だから即死だろうな。

頭に当たればだけどね。

ダン！

死ぬと覚悟して諦めた時、茂みから何やら変なテカブツが出てきて、回転式の弾に当たった。

多分3メートルはあるであろう。

よくよく見ると蜂の形をしていて、羽音もブーンて鳴っている。

弾が当たつたトコから、緑色の血らしき液体が飛び散った。

ブーン……

「ああああああああああああああ！」

ヤクザらしき奴らが悲鳴をあげながら逃げ去る。

それを見た（？）のか、テカブツは茂みの中に入つていった。

……小説の方向がそれた様な気がした人、その通りだぞ。

この小説の主人公がこんなコトを言つのも変だが、本音を言つと、作者の気紛れで書いてるから方向がそれてしまうのだ。

作者に代わって言おう。

大変申し訳ありません。

「本多君なにぶつぶつ言つてるの？ かなり怪しいよ？」

いつの間にか円が来ていた。

……かなり恥ずい……。

あはは、何でも無いかな……あはははは。

はあ。

「回りまじょうか？」

少し斜め前に進んだ円が俺に向かつて笑顔で言つていた。

うん、文句無しの可愛さだよコノヤロー！

朝っぱらにもかかわらず人気の模擬店は満員御礼。

もちろん我らが執事喫茶も満員御礼。

裕大と志流真と伊志田が奮闘してくれている。

頼むぜみんな！！

俺のデートの為に！

絶対に俺を呼び出させるなよな！

と俺は祈るのであつた。

午後

俺たちは大変盛り上がっている。

と言つのも裕大＆志流真＆伊志田、そしてクラスの代表的な女子の  
眞那＆実沙綺＆河中島千沙らと合流したから何だが…

買つもの全て俺が代金を払うという不公平というか、なんというか

…。

1回で買つひ量も多いからかなり財布が軽くなってしまった。

かなりの店を食い廻くした後、俺たちは緊急会議を開いた。

その内容とこいつと……

「伊志田って、ほとんど登場して無いよね？」

「む？ それを言われると困る。大体、伊志田光成って言うのもなあの作者が豊臣秀吉が大好きだからその重臣の名前を俺につけたらやうなったんだ。  
本当なら尾座式清歩のはずだつたんだ！」

それをあの作者があ！」

……今のままでここと思ひそ伊志田よ。

「どうやら」の意見にはみんな賛成らしく、うなずいてくる。

「やうなのか……。」

少し落ち込んだ表情を見せる伊志田。

伊志田よ……そこまで気に入っていたのか……？

その、尾座式清歩って名前を。

俺の意見にはみんな賛成らしく、うなずいている。

「まあそんな」「とより今日の後夜祭だけか…みんな行くのか？」

まだ少し落ち込んだ表情を見せる伊志田は今日あるらしく後夜祭と

やらの話に切り替えた。

つか俺、今初めて後夜祭なんてもんあるって聞いたぞ。

「えつ？」

かーんなりわかりやつすい反応をしてくれた奴がひとり。

「い、言つてなかつたつけえ？　ま、まあ結果的に分かつたんだからあ、い、いいんじやない？」

強張つた笑顔で言いやがる眞那。

なんとなくムカついたので隣にいる志流真の鳩尾を殴つた。

くわえていたフランクフルトを吐き出して、咳き込んだ。

下品だがそれなりに面白かったのか、みんなが笑つたので、俺も笑つてみた。

「な、な、何で殴るんだよ！？」

吐き出したフランクフルトを取つて袋に入れて、言つてきた。

もちろん殴りやすいからに決まってるだろう？

「だろ？　ね。」

とつあべすじで志流真との会話は終わった。

後夜祭までな。

ん~と呟つよりはみんなが後夜祭の為に仮眠取りに帰ったから俺も  
帰った訳なんだけどね。

とこう訳だから寝るわ。

No.11 ハゲしい… セン(後書き)

寒いですね。そうそう、一机を掃除してたらなんと！

自分が最初に書いた恋愛小説が見つかったんですよ！

そんな訳だからそれを書いてみます。原文の

ままで。

No.12 漫才みたくハゲ（前書き）

苦手な恋愛にやるに苦手なコメティを入れてみました。

## No.12 漫才みたくハゲ

RRRRRRR!!

RRRRRRRRRRRRRRRRRRRR!!

RRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRR!!

ガシャン!

ひるそくなる目覚まし時計を頭突きで黙らせる。

少しだけだが額から血が流れる。

それを手で拭つて今黙らせた目覚まし時計を視界が儘ならないま、見る。

2本の針は午後8時30分示している。

ああ眠てえ。

まだ寝たい気持ちがあるが、生憎だが寝過ぎしているから時間がない。

フツ、非情に残念だ。

何か俺、キャラが変わつていなか?

まあそんなコトは気にせずに身仕度を済ませて、裕大の家へ向かう。

いや、アイツのコトだから先に行つてるな。

なら、志流真の所に行く方が妥当かな。

志流真の家に着くと、ベランダをよじ登り、志流真の部屋の窓のガラスの鍵的な所にジッ ライターの火を当てる。

それからバタフライナイフを取り出して、ジッ ライターで温めたガラスの所をくり貫いて鍵を開ける。

そして静かに窓を開いて、静かにお邪魔しま

「土足で勝手に入つてくんじゃねえ泰世あ！…」

俺が土足で入つた瞬間、真横から飛び膝蹴りが俺の側頭部に直撃する。

と思ひだろーー？

しかーしー！

俺の頭はスキンヘッド、そしてかなり頭の形が丸くて、頭のお肌がツルツルだから、直撃せずにそのまま受け流せるのだーー！

お陰様で志流真はそのままの勢いで壁にぶつかって、ノックアウトオオ！

とこう訳で土足のまま部屋に上がつて、志流真を起こして、部屋を出る。

遅いけど俺の頭便利だろー？

「いや、不便だー！」

隣でぼざつている奴はぼつといて、階段を2歩で降りる。

このスリルがたまらないんだよー！

俺たちは杉里邸に向かつた。

杉里邸

ある程度奥に（学校から離れる）行くと、この辺りでは豪邸に部類

それるであります杉里邸の堀が見える。

つーかこの堀、堀じゃなく石垣だな。

俺の身長の5倍はある。

門もでけえ！

たのまもまもまも！

シーン……。

「何い奴だあああーー？」

しばらくして、ある程度声のトーンを下げたどうぶつ女声が聞こえ  
てきた。

泰世だよおおー！

「ナリは普通かよーー？」

フツ、これだから素人は困るよ。

「こやこやおかしいだろーー？」

「泰世あ？ 今行く。」

「眞那姉、上着を着てください。それでは只の露出狂です。」

外で寂しく漫才をしているのになんか中は楽しそうだな。

「おっまつたああ！」

でかい門から、学校生活では見れない様な厚化粧をした眞那と実沙綺が、現れた！

戦う バック?  
ボール? 逃げる  
ピッ!

太陽拳?  
頭突き  
フラッシュ  
???

ピッ!

泰世の頭突き！

「わ！ 危ないでしょー。」

攻撃は外れた。

戦う バック？

ボール？ 逃げる

ピッ！

だいじなものか？

じてんしゃ的な  
かなりすげえ釣竿  
蠢くなにか…。

ピッ……。

ブイイイイイイイイン！

「いやややや！ 変態いいいい！」

「何やつてんだ!」るああああああああ！」

## 志流真の飛び膝蹴り！

ぐはあ！

急所に当たつたああ！

泰世は倒れた。

目の前が真っ暗になつた

「おい！ 女の子の髪の毛をなんだと思つてんだ、てめえはー！？」

「どうやら怒っているみたいだな。

「その前にその歪なバリカンは何なんだよ！？ ガツガツて言つてるぞ？」

ああこれか？

これは桃内士郎氏の小説の番外編での殺人理容師が使つていたバリカンだが、何か問題でも？

「すつゞおおおーいいい、これががあのおバリカンなんだ。」

静かに近付いてきた眞那が蠢くバリカンを触る。

「大有りじや、ボケがあああああ！！ そして眞那！ お前も何触つてんだ！」

やたらと「ぬぐくシシ」をいれる志流真を非難した様な目で見つめる。

もちろん眞那もだ。

ジイイイイイイイ。

「な、な何見てんだよ！… て、照れるだろ…。」

自ら頭を撫でる志流真。

……そつち系かよ…。

とまあ、志流真はほつといてだ、眞那、何時から開始なんだ？

「んーとお、8時。」

は？

もうひとつ前の昔に8時過ぎてるんだけど？

「眞那姉、もうすぐ8時45分です。」

「ふうん…………って大遅刻じゃない！－！　実沙綺、馬を3頭、引  
つ張つて来て！　今すぐ！」

う、馬？

「もう用意できます。」

ええ！？

俺たちの横にはサラブレッドが3頭、鞍をつけて、今すぐどうぞ、  
と言っているかの様にいる。

眞那と実沙綺は軽く飛び乗ると鞭を打つて、颯爽と駆けていった。

それに続いて、俺も飛び乗る。

後ろに志流真を乗せて…志流真の足に鞭を打つ。

「いってええ！ 何しやがるんだー！？」

置いてくぞ？

「右よーし、左よーし、行つてよーし。」

駅員さんの真似をして軽く誤魔化す志流真。

くくく、つづく面白い奴だ、志流真っていう人間はな。

途中志流真の足を叩いているつむこ、学校に着いた……。

No.12 漫才みたくハゲ（後書き）

寒いですねえ。浦和レッズAFCミランに負けましたねえ。だけどスター軍団に善戦でしたねえ。あと少し……だったのに……

No.13 祭で悲しむハゲ（前書き）

短く！

## No.13 祭で悲しむハゲ

後夜祭は屋上で開かれていた。

俺たちが着いた時には既に他のメンバーは揃つていて、結構盛り上がりについて、テーブルの上には各模擬店の品物が並んでいる。

かなり豪華…とはいかなが、普通の家庭の生徒から見ると豪華だろう。

にしてもだ、少し酒臭い奴がちらほらいるが、まさか…。

「泰世ああ遅いぞおお。ヒック！」

古典的なしゃっくりをして裕大が近付いてきた。

こいつかなり酒臭い。

結構飲んでやがる。

未成年のクセに酒なんか呑みやがって、先生に見つかれば確実に退学だぞ？

心配を知らない裕大は缶ビール1本一気飲みする。

急性アルコール中毒なつても知らねえからな。

ぐうううう。

「まあ腹（はら）」しゃべでもしようかな、おひ、あの焼きそば美味そー！」

「本多君、ちよつといいかな？」

焼きそばを紙皿によそつてこると、テーブルの向こう側から円が話しかけてきたが、何だか円は深刻な顔をしている。なん? どうした?

「私ね……イギリス行くことになつたの……」

……そつか……。

いきなりすきて返す言葉が見つからなかつた。

俺は焼きそばを諦めて走り出した。

大きすぎるショックだった。

「なあにやつてんだ？ 泰世らしくないぞ？」

志流真……

「ほらー！ 泰世の好きなインスタントラーメン、しかも野菜をいっぺい入れといったから食え。」

優しすぎる志流真の手からラーメンを受け取り、割り箸を綺麗に割つて麺を皿の中に流し込む。

この人参づめぇ……わ。

この大根も、この白菜も、このキャベツも、この水菜も、このペーマンも、この蓮根も、この里芋も、長芋も、そして……この強烈な臭いを放つドリアンも

つて、何入れてんだよ！

ドリアンは無いだろ！

マジであり得ないって！

「元気出ただろ？」

た、確かにそうだけど……や、マジでドリアンはないわ……。

そう思わないか？

「すまん、俺ん家一家全員ドリアン好きだからわからんわ。」

あつそ……

「まあ帰るで、みんな待ってるからよ。」

ああ……

志流真……かっこよかったです……。

N o . 13 祭で悲しむハゲ（後書き）

遅くなりましたが、明けましておめでとう御座ります！！！  
宜しくお願い致します！！

今年も

甘口、辛口感想どんな感想でも待つてます

「」で、キャラ紹介なのだ！

やつぱりまずは主役から！

本多泰世（一五）

身長：165cm（リアルな作者の身長w）

体重：54kg（これまたリアルな体重w）

趣味：食事・睡眠・読書（またまたリアルな趣味w）

特技：<sup>リアル</sup>速読

性格：意外と鈍感で、もの気に気付くのに遅い。ちなみに我が儘だつたりマイペースだつたり人に併せたりする。気分屋？

備考：本多財閥跡取り、以上！（オイ

という訳で（N O . 1 3 の続き）戻って来たのだが……かなりの力ップルが出来ていて、所構わずにチャついている。

志流真：どういう事だ？

「し知らないって！俺も泰世追いかけた時はこんな雰囲気じゃ無かつたし！」

すんげえ慌てようだ。

この様子だと嘘はついてなさそうだな……多分。

にしても腹減ったなあ……何か残つてないかなあ……サラダ……サラダ

な……い……

ちよ、もひー一度探してみよひ……サラダ……サラダ……サラダ……サラダ……

…サラダ……サラダ……

やつぱり無い……嘘だ。

俺が飛び出した時には山みたいにあつたのにーー！

悪夢だあ……サラダ、円、ドリアン……全て悪夢だあ……！

俺は頭を抱えて、沈んでみた。

「あーーーめんーーめん。ほら、サラダの代わりにステーキで  
「肉なんかいるかあーー？」

軽く志流真の言葉を遮り、持ってきたステーキを上段蹴りで蹴飛ばす。

ステーキは綺麗に弧を描いて、志流真の頭上を越え、酔っ払った河中島千沙のカップルの間に落ちた。

もーまんたい、もーまんたい。

さて、俺は不幸が起き続けるので、何だか面倒臭くなり、テーブルの下に潜り込んだ。

暗くて落ち着く……まあ、外も暗いけどさ。

「じい———」

何やら背後から非情に痛いと言つたか、怖いと言つたか、何と言つたか殺氣？

「じい————つ」

うん、やつぱり痛いほど感じるね。

しかも声も出してるし、間違いなく誰か怨念の塊的な奴いる。

びつするか……恐怖心がすんげえ湧いてくるし……

誰か確認するか……？

『じい————つ』

声がテカクなつたし、確認だけでもすつか……

恐る恐る確認する。

そこには……

誰……？

「深山梨華……同じクラス……知ら……ない……？」

深山、梨華つか？

大変申し訳ありませんが、存じ上げません。

頭をさげる。

「 もう……」

そういうて、持つている本に目線を落とす。

不思議系天然キャラ発けエエエーん！？

「私は……天然じゃない。」

らしい、が、しかし、一般的にこんな暗い所で本を読んでいる奴は十分に不思議だぞ！？

「 気に……しない……」

「 そつか……」

⋮

⋮

⋮

⋮

⋮

⋮

⋮

長い長い沈黙。

一番このタイプの沈黙が嫌いだ。

こいつは苦手なタイプの女子だな。

どーするか。

何か話するか？

何ていつ名前の本を読んでいるんだ？

随分分厚いが……

「近親相姦『守の場合』」

言葉を失う俺。

つまり十八禁つて訳ね？

不思議系天然系ヲタクキャラか……ヤバイな、志流真を越えるヲタクキャラの登場だな。

後々厄介なことになりそうな雰囲気を醸し出してるし、ってかそんな雰囲気以外感じられないね。

どこつもこいつもキャラ濃いわ。

今後俺のツツ「ミ兼ボケ兼ナレーションがツツ「ミ兼ナレーションになりそうな気がして、仕方が無いのだが……

ふと梨華の近くにある目に目がいく。

サラダ……サラダだ、サラダの生き残りだ！

サツとサラダに手をだした。

あれっ？無くなつた？

「私の。」

くれよー少しごらーー野菜が好きなんだよー

「私も……」

サラダが盛られてある皿を、三角座りしたあの三角の部分に確保して、時折サラダを食べる以外ビクともしない。

あとページを捲るとさ。

さて……突如強敵が現れたな。

どつやるか……

とうあえずサラダは確保したいけど、梨華という強敵が鉄壁（？）

の守陣を引いてるし……

どうしたモノか……

ん……？

背後からなら深山も油断してるんじゃ……？

サッヒ、下から抜け出して深山の背後の位置に立ち、呼吸を整える。

今宵の最終決戦が今から始まるのか……

頬をパンパンツツと叩いて準備万端。

一気にテーブルの下に潜りこむ。

サラダ……あら？

サラダは？

「……貴方、バカね？」

背後から深山の声がしたので振り向く。

サラダと本を持って、俺の真後ろで優雅にスカートを揺れながらこちらを見ている。

その田には若干俺を非難するような目をしている。

ようするに、俺はまんまと罵にかかった訳ね……？

目眩が

いじは

見慣れた部屋だな。

あ、俺の部屋か。

夢……だったのか？

N O . 1 4 - 、後夜祭 後編 ケ、（後書き）

寒いですね～そう言えば先日大阪でも雪が積つたですよ！…寒かつたんですけどね……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9839c/>

---

ツルッぱげ！

2010年10月15日22時32分発行